
小石と松

黒戸屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小石と松

【Nコード】

N9162J

【作者名】

黒戸屋

【あらすじ】

まだ、今よりも昔。人は小石に松葉を結んだものを置き続け、想い人を待った。

これは彼らが『ポケモン』と呼ばれる前の、少し昔の物語。

まだ、今よりも昔。人は小石に松葉を結んだものを置き続け、想い人を待った。

それは、もうすぐ三月も終わるといふ日の夕方だった。フミはいつもの様に、職場からの帰り道をのんびりと歩いていた。寒さも過ぎ去り、この町もすっかり春めいていた。桜のつぼみは膨らみ、つくしは顔を覗かせ、よもぎも青々とした芽を伸ばしている。ああ、本当にいい季節になった、とフミは思わず頬を緩ませた。

「こんなに良い天気だと、何かええことでもありそうね」

フミがそう呟いた、そのときだった。突然、ギャアギャアと甲高い鳴き声がフミの耳を突き刺した。あまりの声に驚いてそちらを向くと、ここからさほど遠くもない場所で鴉が何かをつついているのが目に入る。大方、ここらに住み着いている鴉が、また猫か何かをからかって遊んでいるのだろう。フミはそう見当をつけると、哀れな被害者を助けにその場に踏み込んだ。

「こら、悪戯鴉っ、小さい子をいじめるんはやめんさい！」

鴉は乱入者に驚き、飛び退く。邪魔をするなと睨むが、フミも負けじと睨み返す。どうやらこの人間は自分の獲物を返してはくれないようだ。観念した鴉は、カア、と捨て台詞を残すと、口惜しげな視線を向けながら飛び去っていった。

「鴉は追い払ったよ、怪我はない？」

フミが声を掛けると、それまで身を守ろうと縮こまっていたそれが顔を上げた。

てるてる坊主にも似た、黒一色の身体。頭に生えた角。闇色の身体に映える、青と黄の瞳。

「あら、黒鬼じゃない」

黒鬼、と言っても、妖怪の類ではない。彼らはぼんぐりと呼ばれ

る丸い木の実で捕獲することの出来る生き物だ。もつとも、フミが生まれるよりずっと昔では妖怪だと信じられていたらしく、その名残がこの町には色濃く残っていた。かく言うフミも幼い頃、「人が激しい怨みに捕らわれるとき、闇のように深い妬みを抱くとき。その心を糧に、鬼火を纏い、黒鬼が生まれる」などと言った昔話を聞いたもので、

「人をむやみに嫌うたり、陰口を言うと黒鬼が懲らしめに来るぞ」と祖父から脅かされたこともあった。それを聞いて数日程一人で眠れなかったのも、今では良い思い出だ。

「寝床から出てきたところを鴉に見つかったんね。それで」

怪我はないか、と言いかけ、フミは言葉を止める。あの鴉につつかれてできたのであろう、痛々しい傷が彼の頭にあっただのだ。

「手当てしてあげるけ、じつとしてて」

フミは手提げの中から軟膏を取り出し、黒鬼に手を伸ばす。黒鬼は何をされるのかと身構えるが、「大丈夫、大丈夫」と彼女があまりに害のなさそうな顔で微笑むので、半信半疑ながら大人しくその腕に収められることにした。

「痛いかもしれんけど、我慢してね」

その言葉が終わらないうちに、ぬるりとした何とも言えない感触が、黒鬼の傷口に塗りつけられる。まだズキズキと痛むそこに物が触れたのと、軟膏の冷たさに傷口を刺激され、黒鬼は思わず悲鳴を上げた。「わっ、まだだつて！」身をよじって逃げようとする鬼を押さえ、フミはなんとか仕上げの絆創膏を貼り付ける。

「はい、これで終わり」

解放されるなり黒鬼は、騙されたと言わんばかりにフミと距離を開ける。

「ごめんね、でもその軟膏は良く効くから」

苦笑しながら言うが、鬼は警戒を解く様子もない。

居心地の悪い沈黙が流れる。誤解を解きたい気持ちはあったが、彼にフミの弁解の言葉は届きそうもない。街灯がちかちかと瞬き

し、辺りを照らし始めた。遠くからは鐘が低くよく透る声で、時を知らせるのが聞こえる。

「もう帰らんと」

フミは少し残念そうに黒鬼に告げ、「今度は鴉に見つからんようにね」と小さく手を振り、夕暮れの道を戻っていった。

変な人間だな。フミの後ろ姿を目で追いながら黒鬼は思った。鴉を追い払ってくれたと思いきや、突然傷口を弄るとは。一体何だったのだろうか。長年生きてきた中で色々な人間を見てきたが、あの娘の行動の意図はわからない。彼の中で、好奇心がむくむくと頭をもたげる。

——少し、観察してみるか。

黒鬼は外套のような体を翻すと、フミを追って夕闇に溶けた。

フミはどこにでも居るような、ごく普通の娘だった。親元を離れ、一人で暮らしながら食堂で朝から夕方まで働く。料理の腕も愛想も良く、所謂「看板娘」というやつである。彼女目当てでやってくる客も少なくはないようだ。——ただし、彼らは漏れなくフミより一回りは年が上だったが。

「フミちゃん、今日も可愛いねえ」

「どうね、うちのせがれの嫁に来んかい？」

「はいはい、そんなこと言っても値引きはしませんよ」

それは残念だと客は一斉に笑う。家庭的で、暖かな場所だった。つまらない、自分の苦手な雰囲気のところだ。黒鬼は窓から覗きながら溜息をつく。フミを観察してもう三日にはなるが、何一つ変わったことはなかった。助けてから傷を弄るような矛盾した人間ならもつと目を引くようなことをしても良いものだが。恨むとか、憎むとか、自分らが好むような状況は全くない。敢えて言うなら、冬の間にできた赤切れがなかなか治らなくて自分の手のひ弱さを恨めしく思っていることくらいだ。

「やれ、これで昼は一段落じゃね」

店の女将の声が聞こえる。恰幅のよい女がどすんと椅子に座る。フミちゃんも休憩しんさい、と女将は言うが、フミはこれが終わってからにしますね、と皿洗いを続ける。

「ほんまに良う働く子じゃねえ」

「いえいえ、お金を貰ってるんですからこれぐらいは」

耳が痛いねえ、ああそんな意味で言ったわけじゃ、わかつとるよ、などと言っているうちに皿洗いも終わる。フミは三角巾を脱ぎ、女将の向かいに座る。

「赤切れが酷いのが悪いねえ」

「まだ昔より大分ましなんですよ。女将さんに頂いた軟膏がなかったら、もうこんなもんじゃありませんから」

フミは言いながら、割烹着かっぽぎから軟膏を取り出す。

黒鬼はおや、と思った。フミの手にあるのは紛れも無い、あの妙な物が入っていた入れ物だ。

「そういえばこの間、あの悪戯鴉が黒鬼にちよっかい出してたんですよ」

思わぬ自分の話題に、黒鬼はどきりとする。

「怪我をしてたからこの軟膏を塗って手当てしたんですけど、大丈夫かなあ」

「その軟膏は赤切れ、火傷、切り傷、擦り傷なんでも御座れじゃけ、大丈夫じゃと思うよ。それにしても、うちの看板娘に手当てされるなんて黒鬼も運がええねえ」

そういえば、あの程度の傷はいつもならもうしばらく痛むはずだ。それが（流石にまだ塞がってはいないが）今は、痛みを感じない。

「あはは、ならええんですけど」

黒鬼は初めて、自分が勘違いしていたことに気付いた。あの人の良い娘は、好意で自分を助け、手当てまでしてくれていたのだ。その上、恩を仇で返した自分を三日経った今でも気遣っている。硝子窓に映る一匹の黒鬼の姿。自身の頭には、フミが貼った絆創膏が、粘着力を失いながらも傷を守ろうとしがみついている。

あの娘には悪いことをした。何か、恩返しができないだろうか。

事件はそれからややもせず起こった。いつもと同じ昼時の、混んだ店内。常連の中に、見慣れぬ青年の姿があった。

「お兄さん、初めて見る顔じゃね」

「最近ここに越してきたばかりなんです」

「ああ、そうなんね。若い男の子を見るのも久しぶりじゃねえ、ここに来る客はみんな苔の生えたような人らばかりで」

そりゃあ酷い言い様だ、と他の客が抗議の声を上げる。「フミちゃんも女将さんに何か言っちゃってよ」という声を背に受けたフミは、何の騒ぎだろうと厨房から顔を出した。

呼吸が、止まった。

呼吸だけではない。鼓動、光景、音、匂い。彼女の周りの物、すべてが止まった。

穏やかで心地よい声。落ち着いた雰囲気。垢抜けた、ハイカラな服装。柔らかな笑顔。

特別ハンサムというわけではない。しかし、青年の『何か』が、激しく心を揺さぶるのだ。

周りにはたくさんの店の客が居るというのに、目には彼しか映らない。

顔が熱い。耳の先まで真っ赤になってゆくのが、自分でもわかる。

「初めまして」

青年が投げかけた言葉で、フミは急に我に返った。「はっ、初めまして！」声が上擦る。

「す、すみません。まだ火を使つとる途中なんで」

碌々目も合わないうちに、フミは慌ただしく厨房へと戻る。客と青年は予想外のフミの行動に、ぽかんとするしかなかった。その最中、女将だけは、なるほどねえ、とほくそ笑んでいた。

この一連の出来事を、黒鬼は窓の外から窺っていた。人間という生き物は、強い感情を抱いたときに、彼ら黒鬼でしか嗅ぎ取れない匂いを発する。例えば、黒鬼が好物とする恨みや憎しみの感情は、まわりつくような甘い香りがする。今、この場にむせ返るように満ちている匂いは、甘く爽やかな、言うなれば夏蜜柑のような香り。一目惚れ、か。

フミは、青年に恋をしてしまった。

恋はするものではなく落ちるものとはよく言ったもので、フミはそれ以来、四六時中青年のことばかり考えていた。女将と彼の会話を立ち聞きして得た情報は、「この近くの学校へ新任として、都会からやってきた社会科教師であること」と「趣味は歴史や民話、昔話を調べること」ということだった。肝心な名前や恋人の有無は何故か女将は話題に出さず、彼女らは世間話ばかりしている。フミ自身は青年に聞くことができれば一番良かったのだろうが、彼女は青年の顔をまともに見ることができない。その日も会計をしたものの、釣り銭を渡す手が震えて小銭を落とす始末だった。

「す、すみません！」

「ああ、いや。気にしないで。それより、手は大丈夫？」

何のことかと思っただが、すぐに赤切れのことだと気付き、フミは手を隠す。

「大丈夫です、見苦しい手で、すみません」

「そんなことないよ、頑張って働いてる証拠だよ」

青年が笑いながらそう言うので、フミはすっかり参ってしまった。

「フミちゃん、こんなおまじない知つとる？」

夕方、厨房の片付けをしながら、女将はフミに問いかけた。

「小石に松葉を結んだものを置き続けて、っていうのなんじゃけど」

フミは首を横に振る。女将は、「恋のおまじない、ってやつよ」と意地悪げな笑いを漏らしながら言う。そんな、私は別に、そんな、とフミは顔を真っ赤にして何かを否定するが、女将は意にも介さない様子だ。

「まあ、それを置き続けてどうなったらかは忘れたけど、恋が叶うんじゃない？」

そこが一番肝心なところじゃないか、と思うが、からかわれるのでフミは口には出せない。

「なんにせよ、私はきっかけは大事じゃと思うんよ」
「きっかけ？」

「人が変わるには何かしらきっかけが必要なんよ。無理じゃと思っ
とつても、きっかけ一つあるだけで意外とあっさり一歩踏み込めた
りねえ。まあ、頑張りんさい」

一通り話し終えると、それじゃあ今日はお疲れさん、と女将はフミの背を叩き、店じまいを始めた。「お疲れ様です」フミは控えめに言う、心許ない様子で店を出た。

夕日に照らされた帰り道。フミは女将に言われた言葉を反芻しながら、悶々と考え込んでいた。きっかけさえあれば、前にも後ろにも動けないこの状況を変えることができるのだろうか。ふと、道端の松の木が目に入る。

「……小石に松葉を結んで」

手頃そうな小石を拾い、枝から拝借した青くしなやかな松葉を結びつけようとする。しかし、松葉はぼきりと折れ、フミの思う通りに結ばれてはくれない。しばらく松葉と格闘し、何本か葉を犠牲にしたところで、なんとか結びつけた。

「それを置き続ける」

松の木の根元に完成した小石を置く。

「恋が、叶う」

会話を成立させることもままならない自分が、この恋を成就させることができるのだろうか。フミの口からため息がこぼれる。

「せめて、女将さんが忘れた部分を思い出してくれたらええのに」
変わりたい、という願望がフミの中で生まれていた。何でも良い、きつかけが欲しい。気持ちを伝えるまで行かなくとも、名前を聞くだけでも、と。

その日以来、フミは帰り道に松葉を小石に結び、木の根元に置くようになった。人に見つからないように、ひっそりと、小石を置き続けた。恋が叶いますように、一歩踏み出せますように。そう、願いながら。

日々積み重ねられてゆく小石を眺めながら、黒鬼は物思いに耽っていた。

人間とはおかしな生き物だ。『おまじない』だとかいう、無意味なことをやってはそれを心の拠り所にする。しかし、『おまじない』の力が、心の拠り所を得ることで自分を奮い立たせた彼ら自身の力かはわからないが、望んだことを達成する人間を見たのも少なくなかった。

氣の持ち様、というのは生き物に大いに影響を与える。氣が滅入っていれば、どんなに健康的な者も病人の様になってしまうし、逆に、自分は出来るのだと思い込めば、やり遂げるどころかその能力を超えることをやってのけたりする。フミはどうだろうか。黒鬼は人の良いあの娘のことを思い浮かべる。彼女もこの状況を変えたいという望みを持っている。だが、現実ではこの石ころの山だ。もう一押しが足りないのか。

うつむ、と黒鬼は唸る。——か八か、やってみるか。

下宿の壁にぶら下がった暦が、この町にやってきて一ヶ月過ぎたことを告げていた。町の住民は皆親切で、この土地に不慣れな青年を率先して手助けた。お陰で青年は（時々方言がわからない、という問題を抱えてはいたが）一月しか経っていないと思えない程馴染んでいた。

ここの土地柄に助けられた、と青年は持ち帰った仕事の手を止めて思った。まだ文明開化も迎えていない頃、ここは他との交流を持たない閉鎖的な村だったという。外部から物資が入り難く自給自足するしかなかった村人達の間、助け合いの精神が生まれても不思議ではない。それを強固なものにしたのは、何年だったか、に起こった流行病で……とここまで考え、青年は自分の歴史狂い振りに苦笑する。仕事の続きをしよう、明日出す課題を作らないと、と机と向き直った。

窓硝子が乾いた音を一つ鳴らした。不思議に思った青年が窓の外を見遣ると、そこには小石が一つ落ちていた。ただの石なら見過ごしてしまいそうだったが、地面に黙って転がっているそれには、青々とした松葉がくるりと器用に結び付けてあった。

桜の木々が白い服から緑色の服へと衣替えを始めた。五月晴れの光が厨房に満ち、穏やかな時間が流れている。

「こんにちは」

暖かな昼前の食堂に、青年の声が響いた。フミの心が無意識のうちに躍る。程なくして女将の威勢の良い「焼き魚定食一つ！」と言う言葉が飛び込み、フミは調理を始めた。魚を火に掛け、野菜を刻む。包丁の刃先が軽やかに舞う。暖めた味噌汁にねぎを入れ、焼き上がった魚に大根おろしを添え、お盆に出来上がった品々を綺麗に並べる。フミの仕事は元々丁寧だが、客が青年となるとことさら綺麗に仕上がっていた。

フミが厨房から出てくると、女将と青年は世間話に興じていた。普通に会話できてうらやましいな、と思いながらフミは青年の前に定食を置く。青年は笑顔でありがとうございます、と会釈し、フミの顔を赤く染めた。その横では、「偉いねえ」と女将がしきりに感心している。

「それで、選ぶのに時間が掛かってしまって」

「そりゃあ喜んでじゃわ、一生懸命選んでもろった贈り物なら」

どうやら午前中、青年はずっと誰かへの贈り物を探していたらしい。見れば、彼の隣の椅子には荷物と一緒に鮮やかな包装がされた包みがあった。誰に送るんだろうかとフミは厨房へ戻りながら耳をそばだてる。

「やっぱり大事な人なんで、妥協したくなくて」

その言葉だけが、やけにはつきりと聞こえた。視界がぐらりと揺れ、足がもつれる。よろけたフミに向けて女将が大丈夫かと声を掛けるが、彼女は返事ともわからない、不明瞭な言葉を残し厨房へと入った。

それから仕事が終わるまでのことを、フミは覚えていない。

青年は昼食を食べ終えた後、下宿先に戻って手紙を書いていた。故郷へ残した贈り物の受け取り主へ、近況を報告するためだ。

『お元気ですか。僕は元気です。赴任して一ヶ月になりますが、こちらの人は優しい人ばかりで、いつも助けられています……』

何度も書いては消し、消しては書きを繰り返す。どうやら青年は手紙を書くのは得意ではないらしい。なんとか一通り報告を書き終え、『それでは、お体に気をつけて』と最後に添える。これで後は郵便で送るだけだ。ふと青年が窓の外を見ると、空がその顔を赤らめている。随分と時間が経ってしまったようだ。まだ郵便局は開いているだろうか。青年は慌てて便箋を封筒に入れ、封をすると、包み紙を持って部屋を出た。

郵便局はここから少し遠い場所に位置していた。自転車なら間に合う、と青年は下宿の裏に止めている自転車を取りに急ぐ。

コッソリ。

乾いた音で、硝子窓が鳴く。青年ははっとして建物の影に身を潜める。そっと地面の方を見ると、松の葉が結びつけられた小石が落ちていた。

ここところ、この正体不明の悪戯が続いていた。誰かが窓に投
げているのなら、人影の一つでも見えそうなものだったが、何度窓
の外を見てもそれらしき影は見えない。そして残されるのは窓硝子
に投げつけられた、松葉が結びつけられた小石。実害があったわけ
ではないが、やはり気に掛かる。だが、これで犯人がわかる。青年
は悪戯者の姿を確かめようと顔を上げた。

てるてる坊主にも似た、黒一色の身体。頭に生えた角。闇色の身
体に映える、青と黄の瞳。

青年の目に映ったのは、一匹の生き物だった。あれは影坊主じゃ
ないか。青年は息を飲む。確か、この辺では『黒鬼』と呼ばれてい
るんだったか。恨みなどの人間の持つ負の感情を求めて生きる彼ら
が、何故こんなところで、こんな悪戯をするのだろうか。青年は自
身の持つ記憶の中から原因を探るが、心当たりはなかった。考えて
いる間に、影坊主は満足げにこの場から離れる。この悪戯の意図を
知る機会はないかもしれない。青年は自転車に飛び乗ると、影
坊主の後を追った。

赤い幕が下り始めた空の下を、フミは足取り重く歩いていた。昼
の一件が足枷となり、歩みは遅々として進まない。気が付けば、フ
ミはあの松の木までたどり着いていた。根本を見ると、いくつもの
小石が身を寄せ合っている。

「これも、無意味になつてしまつたね」

失恋がフミの胸をじくじくと侵食してゆく。

「私、変われなかった」

失意より、悲しみより、一步も進むことができなかった自分が悔
しかった。おまじないをしている、と言う事実に甘え、結局何一つ
として進展させられなかった自分が不甲斐なかった。拳を握り、涙
を堪える。

「今の私には泣く資格もない」

打ち拉がれても良いのは、努力をした人間だけだ。フミは硬い面

持ちで家を目指そうと顔を上げた。その時だった。

こちらへ向かってくる自転車が視界に入る。フミは戸惑った。自転車に乗っているのは、間違いなく彼女が昼に失恋した青年だったのだ。

「あれ、フミさん、だよ、食堂の」

声を掛けられ、心臓がどきりと鳴る。もう破れた恋だと頭では理解しているはずなのに、彼女の心臓は無邪気に飛び跳ねていた。そんなフミを余所に、青年は言葉を続ける。

「今、帰り？ 今日も一日お疲れ様」

青年の労いの言葉が暖かくて、辛い。「お出かけ、ですか？」なんとか言葉を絞り出す。青年は首肯し、郵便局にね、と答える。その返事にフミは違和感を覚えた。

「郵便局、反対の方向じゃないですか？」

そうなんだよね、と青年は苦笑する。

「実は、ちよつと影坊主、じゃなかった、黒鬼を追いかけててね。フミさんは見なかった？」

見ていないと伝えると、青年は残念そうに肩を落とした。

「ああ、郵便局も閉まっちゃっただろうなあ。……一日ぐらい遅れても大丈夫かな」

「お昼の贈り物ですか？」

胸の痛みを抑えながら、フミは尋ねる。それはそうだ、大切な人が喜ぶと思って選んだ贈り物なら、誰だって本人に一日も早く渡したいに決まってる――

「うん、もうすぐ母の誕生日なんだ」

「えっ？」

思わぬ青年の言葉にフミは思わず声を上げた。

「恋人さんに、じゃなかったんですか」

青年は少し悲しそうに、「残念ながらここ数年、ずっと独りでね」と笑う。

「それじゃあ」

私は、まだ。重かった心がふわりと空を舞う。嬉しい気持ちと、ほっとした気持ちとで涙が出そうになり、フミは慌てて下を向いた。「どうかした？ 体調でも悪いの？」

青年が心配そうにフミの顔を覗き込む。不意に目を合わせられ、「あ、あのっ」口から、堰き止められていた想いがこぼれだした。

「名前、教えてくれませんか！」

夕陽が空を燃やしていた。広がる朱一色の中で、黒い影が二人を見下ろしていた。甘酸っぱい匂いに鼻をくすぐられ、黒鬼は頬を緩ませる。どうやらフミが望んでいた『きっかけ』は上手く作ることが出来たようだ。この後どうなるかは本人次第、というところか。さて、恩返しも終わったことだ、自分は退散するでしょう。黒鬼はケタケタと笑いながら、夕焼けの空を背に飛び去った。

まだ、今よりも昔。人は小石に松葉を結んだものを置き続け、想い人を待った。

その小石がなくなったとき、想いは伝わったという。

小石と松——「恋しと待つ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9162j/>

小石と松

2010年10月8日15時12分発行